

第54回

確かな効能が物語る薬

名薬探訪

『加世田血のくすり』

健生堂漢方研究会・
薬剤師

加藤三千尋

先人の知恵光る温故知新の煎じ薬は九州の名家・医師の手により生まれ代々受け継がれる第一級の家伝薬



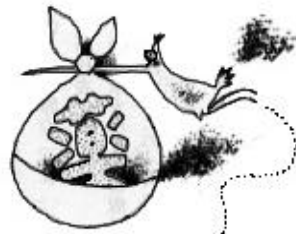
医師の治療に用いた処方薬が創製の原点

『加世田血のくすり』は、有限会社青木流芳院が製造・販売している家伝薬の煎じ薬である。南九州を中心に、今でも根強い人気を誇っている。

青木家は、もともとは医師の家系である。現在地である鹿児島県川辺郡大浦町での歴史は、一六〇五年（慶長一〇年）頃からとされる。これは、青木家を招いたとされる家に残る記述か

らの推測である。以来四〇〇年という歳月の長さを省みれば、青木家が大浦の名家中の名家であることが垣間見られる。

さかのほれば、隣町の坊津にいたという。ここは、古くは遣唐使船の寄港地で、異国文化の入り口でもあった。すなわち、青木家が南蛮貿易や、鎖国状態にあった江戸時代、薩摩藩の密貿易における異国との技術交流に深く関わっていたことを示唆する重要な事実として注目しておく必要がある。



医師の処方から名薬が生まれた

また、明治初期までこの一帯は加世田郷と区割りされていたことが『加世田血のくすり』の呼称の由来である。

あるかは定かでない。ただ、「売薬」として創製されたのではなく、診察に伴って用いられる処方薬として生まれたものであることは間違いない。

名薬探訪

明治の終わり頃には、鹿児島市内にも住居と診療所を設け、往診の範囲を広げている。月一程度は南九州各地で往診を行っていたとの記録もある。

「このようなことから、『加世田血のくすり』によって快癒した人からの口伝えにより、評判が広まり、その結果として、往診による処方と並行する形で、『売薬』としての販売も行われるようになったのではないかと筆者は推測する。

また、行商のような販売員もいたことが相乗効果として、『加世田血のくすり』の普及に一役買ったようだ。医師としての往診も、昭和四〇年代初頭までは続けられ、その頃の患者や当時を知る人々が今でも服薬しているという。

現在、『加世田血のくすり』は特別調剤を除くと全部で六種類

ある。

その中で、もっとも販売数量の多いのが「神命湯」である。事実、『加世田血のくすり』といえは、「神命湯」のことを思い浮かべる人も非常に多い。

民間薬と一線を画す漢方にも適する名薬

「神命湯」は、葛根、川芎、蘇葉、芍薬、当帰、茯苓、香附子、羌活、陳皮、白朮、遠志、牡丹皮、酸棗仁、地黄の十四種類の生薬から構成される処方だ。



『加世田血のくすり・神命湯』

効能 神経衰弱・不眠症・めまい・頭重・血の道・肩こり・冷え症・のぼせ

経衰弱・不眠症・めまい・頭重・血の道・肩こり・冷え症・のぼせに効果がある。

一包を二七〇mlの水から九〇mlに煎じたものを食前に服用する。二包が一日量だ。

ちなみに、ほかの処方を挙げると、婦人血の道や月経不順、産前産後に用いる「青木家玉湯」、神経痛やロイマチス、関節炎に用いる「鎮痛補血湯」、血の道や冷え症、どろつき、息切れ、のぼせに用いる「鎮狂湯」、かぜの諸症状に用いる「青木かぜ薬」、吹き出物やじんましん、かぶれの薬「浄血湯」がすべてである。

これらの『加世田血のくすり』は、正確には家伝薬であって漢方薬ではない。

しかし、「神命湯」の処方内容を解析してみると、補血活血、

解表理気、補脾安心といった現代の医学的な効能面での理論

づけが容易にできる。

つまり、『加世田血のくすり』

は、家伝薬の範疇に入るとはいえ、いわゆる民間薬とは一線を画し、漢方的な意義の高い名薬であるといえるだろう。

健康保険で処方される薬と違い、『加世田血のくすり』は、愛用者の価値観の上に成り立ち、先人達がその時々積み重ね薬き上げてきた絶対的な信頼の上に成り立っているものである。

医療そのものが「治療」から「予防」へとシフトしようとしている今こそ一度原点に立ち返り、現代人が失いかけている、自然治癒力を高める、ことを再度見直す時期に来ている。

煎じ薬という温故知新の中に先人の知恵が光る『加世田血のくすり』こそ世紀と世代を越えて愛され続ける一つのよき例といえよう。